



●ICD2026 を開催します

本年も「インターナショナル・カラー・デイ (ICD)」を開催します。

ICD は AIC (国際色彩学会) が提唱する色彩記念日で、昼と夜 (光と闇) が拮抗する春分日と定められ、毎年 AIC 加盟各国で様々なイベントが開催されております。

色に関心のある方々の参加申込をお待ちしております。

【開催日時】2026年3月20日 (金・祝)
13時～16時 (予定) ※オンライン開催。

【参加費】色彩学会会員：1,500円、
非会員：3,500円。

【開催内容】・第8回 ICD 開催の挨拶・
『MIC (Most Impressive Color) 2025』
授賞式。第8回 ICD 特別企画：『色彩とデザインと地域貢献の可能性』・トーク1「平和とキッズファッションショー (予定)」鶴田能史氏 (tenbo デザイン事務所) ・
トーク2「札幌の景観色70色 (予定)」
札幌イメージコーディネーター研究会。

今回は、色彩教材に関係するコンテンツ
満載と思います。詳細は、以下リンクをご
覧下さい。

<https://color-science.jp/ICD2026/>

(MIC・ICD 実行委員長：吉澤陽介)

●草木染めで緑色の綿糸を造る②

前回お伝えした通り、草木染めで綿糸を緑色に染上げる為、平安時代の延喜式に記述されていた原料を使用して実践した結果、高彩度・高明度の緑色の綿糸に染上げるのが如何に難儀であるか体感できた。その難しさは技法の複雑さと再現性の低さにあるようだ。工程と順序を巧みに操れる熟練の職人でないと狙った緑色の衣服を自在に再現出来ないのではないかと思った。

養老律令には、官位序列に深緑や浅緑の規定があり、平安貴族も襲の色目に萌黄・あおの名称で緑色の小袷が使われているが、当時の権力者や貴族などの一部にしか用いることが出来なかった色であることも理解できる。

一般庶民が普段から緑色の布、衣服を使う事が出来るようになるには文化発展とともに染色技術・商品流通等の発達も加わってきた江戸時代初期前後までかかったということか。このことは「みどり」という色名が「あお」から分化して独立した語彙として庶民生活の中で普通に使われるようになるのが遅れた要因の一つになっていると感じる。

今後これまでの反省と課題を踏まえ、目標とする萌黄色の綿糸を創出できるまで実験を重ねていきたい。

(竹田 利明)

●大辞泉ひろいよみ 115ーし

紫電：しでん。紫色の電光。鋭い目の光。また、研ぎ澄ました刃などの鋭い光。紫電一閃。

紫都：しと。「紫」は紫微垣のことで、天帝の座の意。天子の居所のある所。帝都。みやこ。

紫藤：しとう。フジのこと。

紫銅：しどう。青銅。唐金。

地塗：じぬり。彩色画面などで、下塗りをすること。蒔絵で、金銀などの粉を固着させるために、漆を薄く下塗りすること。

紫斑：しはん。紫色の斑紋。皮膚や粘膜の組織中に出血することによって起こる紫色の斑点。

紫薇：しび。サルスベリの漢名。

死人色：しびといろ。死人の青ざめた気味の悪い顔色。土気色。

渋紙色：しぶがみいろ。渋紙のようなくすんだ赤色。

渋染：しぶぞめ。柿渋で染めること。また、その染め色や染めた物。

紫文：しぶん。紫式部が書いた文章。源氏物語。

四方白：しほうじろ。兜の鉢の飾りの名。前後左右に白め、または銀を張ったもの。

紙墨：しばく。紙と墨。また、墨で書いた文書。

*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)